

子どもの学びを支える学級づくり

～ 話し合いの場づくり・学級の約束づくり・変容を価値付ける評価 ～

長門市立通小学校 原田 健一郎

1 子どもの学びを支える学級の条件

「学び」のとらえ：「子ども自らが他と主体的にかかわり続けていく営み」

「学び」は、赤ちゃんが少しずつ自分の世界を広げていくことと重なる。

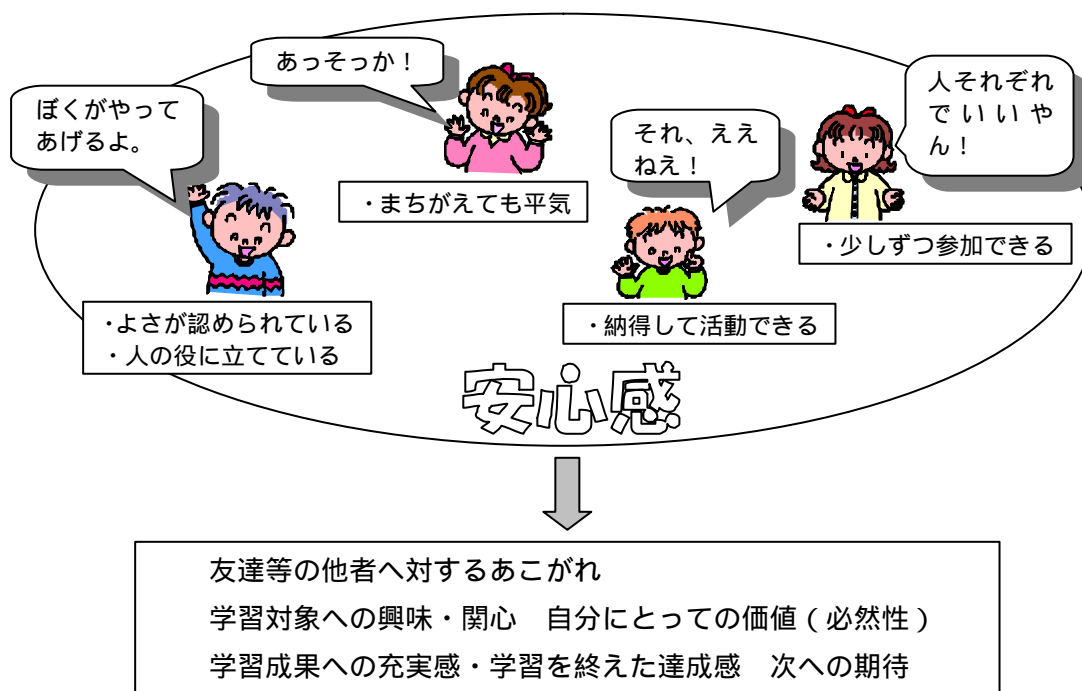
・身近な信頼できる人がそばにいてくれる 少しずつ遠くのものへかかわっていく
(安心感)

・身近な人が使っている 使ってみようとする 使いこなせるようになっていく
(安心感・あこがれ)

・対象そのものに惹かれる
(興味・関心・必然性)

赤ちゃんの学びと学校での学びは、人間の学びであることから変わりはない

学級における「学び」を支える条件



制度の中での教育活動だから制限がある。ここから先は「だまされたと思ってやってみてよ」と励ましながらも、やらせていかざるを得ない場合があり、見極めが必要になる。

2 自分の思いを安心して語れる話し合いの場

(1) なぜ「話し合い」なのか

「話し合い」は、相手とつながり合いながらわかっていく営みの一つ

- 「話し合い」 ・安心して参加できる
- ・納得して参加できる
- ・少しずつ参加できる

(2) 「話し合い」を取り入れていった経緯

低学年期の子どもは話し好きである。朝教室に行くと、様々な思いを抱いているのであろう、一生懸命に話し掛けてくる。しかし、高学年になるとしだいに話さなくなる子どももいる。成長していく過程で、人と話すことに恥ずかしさを感じるようになることも理解できるが、この子達は話す楽しさを十分に感じる経験が少なかったのではないだろうか。そこで、低学年期に話す楽しさを十分に味わわせるとともに、よりよい話し方を身に付けさせていくことが必要だと考え、朝、フリートークの時間を設定した。

フリートークの時間の導入に当たり、最初、一人の子どもに話題を提供させ、それに関連した話をしていくように指導した。しかし、子どもたちの発言は少なかった。そこで、教師側から「何か話したいことない？」と問いかけた。つまり、話し合いの型を一切取り除いたのである。また、日頃から子どもと話すときには、共感的に話を聴くことを特に重視し続けた。その結果、次々に子どもたちが発言をするようになった。最初は発言者に偏りが見られた。しかし、発言回数には差があるが、次第にすべての子どもたちが自主的に話せるようになってきた。

更に、質問や意見等の話し合いを活性化させていくために有効な発言の仕方が見受けられた場合には、教師がその発言のよさの価値付けを繰り返し行った。その結果、子どもどうして質問したり、意見を言い合ったりする話し合いが自然に日常生活の中に多く成立していった。

3 子どもにとって必然性のある学級の約束づくり

学校には多くの約束がある。学級内でも同様である。集団での生活を円滑に送られるようにしていくためには約束が必要である。しかし、その約束の必然性を子どもが感じる以前から、約束を押し付けてしまうことが多かった。問題が起きることは教師にとってやっかいなことだが、子どもにとっては、その問題こそが約束の必然性を感じる絶好の機会である。納得のいく約束が生まれ、自分にとって意味のある安心感がもてる約束となる。教師は学級内での問題に対する意識を変えていく必要がある。そこで、最低限度の子どもたちの健康・安全を守るための約束以外は子どもが必然性を感じるまで子どもたちに示さないようにした。

例えば、本学級では掃除は学級に分担された場所であれば、自分のやりたい場所をど

こでも掃除してもよいことにしていた。すると、多数の子どもが同一の掃除場所を希望することがあり、効率的に掃除ができないという問題が生じた。その結果、同じ場所を掃除できるのは続けて3回までにしようという約束が話し合いによって生まれた。

このように子どもたちは、常に学校生活を自分にとってよりよいものにしていくためのアイデアを出しながら生活するようになっていった。

4 子どものよさを見取り続ける評価

自分の思いや願いをもって主体的に学校生活を送る姿は、他に積極的にかかわっている姿から評価できる。子どもの他へのかかわりの様子をよりよい方向にしていくために、その評価をもとにしながら支援をしていく。

実際には、子どものその日印象に残った、他とのかかわりの実態とそのようなかかわりになった原因の考察、よりよいかかわりにしていくための支援の3つの項目を立て、評価していった。しかし、継続して評価していくことで明らかになってきたことは、自分自身の子どもを見つめる視点が限られていることや、よりよい方向へ導くための支援の手立てを知らないという実態であった。そこで、評価の前に教育関係の書籍を一節ずつ読むようにすることで、新しい視点で子どもを見つめ返せるようにした。その結果、子どもと接するとき一層注意深く、新たな視点をもって子どもを見つめることができるようになった。更に、必ずしも有効とは言えなかったが、子どもに新たな視点からの声掛けができるようになってきた。

【図書から得た新たな視点】

- ・子どもの社会性は、共通の楽しみな目標を設定し、その実現に向けてみんなで知恵を出し合い、力を合わせて活動する体験を積み重ねることで形成される。
子どもにとって楽しく、力を合わせて体験できる活動 **かけ算九九リレー**・**八の字跳び**
- ・学習過程でエネルギーを出し切り、そのことについて教師に評価を得られたのであれば、子どもは失敗から知恵を学ぼうとし、むしろ次への活動に向けて意欲と自信を高める。
夢中で取組める学習活動 **取組そのものへの価値付け**
- ・自分の体を使ってやってみてわかったことは忘れない。生きて働く知識となる。
体験的な学習活動を可能な限り多く取り入れる **自分の思いで活動できているか見取り**
- ・自分の生活と学習を結びつけて考える学び方が身につくと、子どもは学ぶことにより自分の生き方が高まることや、学ぶことの楽しさや喜びを実感するようになる。
子どもの発言を**注意深く聴き**、**価値付けを行う**

等

明治図書 子ども学入門「子どもを捉え育てる」力量を高める 藤井千春 著

5 平成17年度の様子

子どもの実態

- ・やるべきことはすばやくできる
- ・自分の思いを表現しようとししない
- ・自分の思いをうまく表現できない
- ・対人関係を避けている
- ・遊びの場や休憩時間は自分らしさを出せるようになってきている
- ・友達関係が円滑に結べていない(男女の仲?)

指導の実際

- ・楽しい時間の設定(学習・休み時間・エンカウターの活動)
- ・個別での対話
- ・話さないことも認める風土
- ・ほめることで自信をもたせる
- ・納得して進める学習活動(これが辛さと感じている子どももいる)
- ・信頼関係の構築に伴い少しずつ人とのよりよいかかわり方に気付かせていきたい。